課題意識にもとづく学習指導の実際

——古典教育のばあい——

下田　忠

Ⅰ　実践経過

㈠　昭和三十九年八月二十二日、教育課程研究集会（於福山）において、前年度の実践にもとづき、「古典読解における文語のきまり指導の実際」と題して発表した。その時の具体例として「課題意識にもとづく学習指導の実際」を示した。（広島県高等学校教育研究会国語部会誌「年報六」を参照）　したがって自分の、つたない課題学習のあゆみは昭和三十八年度からはじまったことになる。手さぐりで自分なりにはじめたこのあゆみは、今にして暗中模索の域を脱していない。

㈡　ここに提示するものは、転勤以来、尾道北高校で新たに出発した四十年四月から現在（四十二年十月）までのあしあとである。四十年四月に入学し、来年三月卒業予定の生徒二百五十名を三年間持ち上った学習指導の報告である。

Ⅱ　ねらい

㈠　生徒の側から

(1)　学習活動の主体化　（生徒みずからどんどん読解の作業を進めて行けるように）

(2)　学習の内面的な深化——理解の完全化（読みを掘り下げ、読解鑑賞を深化し、完全にする）

(3)　発展的学習の推進と応用力の培かい（その教材の理解を完全にするばかりでなく、発展的に追求しようとする意欲のもとに、他の関連教材を読む——読解・鑑賞の応用力をつけるように）

(4)　集団思考のよろこび（グループその他みんなで相談しながら課題を解決）

(5)　復習の便宜（自己評価）

㈡　教師の側から

(1)　学習目標、学習の方法・順序の提示（この教材ではどういうことを、どのようにして、どういう順序で、をはっきり示し得る）

(2)　教室での学習の有効化、能率化（学習のポイントをはっきりできるので、重点的学習が推進され、したがって有効で能率的に学習が進められる）

(3)　指導項目の整理と体系化（年間を通して、あるいは三学年

間を通しての指導の体系を教師自身はっきりできる。指導することがらが大きく抜けたり、同じ項目だけいたずらに詳しくなったりしないで、発達段階に応じて大きな見通しに立って指導計画を立て、さらに実践のあとをながめ指導項目を整理しながら進むことができる。）

Ⅲ　課題作成の手続きと方法

(一)　一年・二年（乙Ⅰ）　三年（乙Ⅱ）の教材を見通して、指導計画の大綱を決めた。

一年――読解の基礎になる「文語のきまり」についての知識と理解を一通り与えることに力点（基礎力養成）

二年――読解の応用力を養うために、読みの深まりを志すことに重点（「文語のきまり」の理解もうずまき状に復習し高めながら）

三年――読解力・鑑賞力の完成をめざした。（「文語のきまり」についての理解も最終的に整理）

このような見通しに立って各学年毎に「指導計画表」を作成した。〔資料Ⅰ・資料Ⅱ・資料Ⅲの各学年指導計画表参照〕

(1)　単元・教材に即して具体的な指導目標を立てた。

(2)　指導目標に応じた指導項目を段階的重点的に、しかもらせん状に配列した。

(二)

(1)　教材研究をおこない、その過程で出て来た指導項目もあわせて、計画表の指導項目らんをうめた。

(2)　教材研究の過程で生まれた読解上の問題点や鑑賞上の醍醐味を核に、その教材の指導目標・重点指導項目と密接な関連において課題を作成した。

(3)　教室で意図する能力が段階的におさえられるように指導順序を考えて配列し、プリントした。

（留意点）重点的指導項目については、その項目の学習がらせん状に反復するよう課題化することを心がけた。相当に認識が深まった時期に、まとめをして理解と知識の確認深化をはかるようにした。

〔資料Ⅰ〕　一年古典乙Ⅰ指導計画表　　教科書「古文一（古典乙Ⅰ）一・二年用」（東京書籍）

学期	単元	教材	指導目標	指導項目 文章	指導項目 文	指導項目 語	課題との関連
一、古文入門	A 文語文と口語文		(イ) 文語と口語のちがいのあらましを知る	(1) 係り結びの呼応 (2) 助詞の省略		(1) かなづかい (2) 助詞・助動詞 (3) 接助「ば」（仮定条件 確定条件）	課題四、二 〃 一、三、七 六、五、八 一〇

一					
	B 近世の和歌	(イ) 和歌のあらましの意味をとらえ、韻律に慣れる		(1) 文の構造（修飾）	(4) 用言の活用と活用形の用法
				(2) 動詞の活用	(1) 助詞「の」「ば」の意味・用法
	C 笑ひ話	(イ) 会話文と地の文を区別し、話のあらすじをつかむ	(1) 会話文の発見 (一)	(1) 主語と述語（主語の省略）(六)(九)	(1) 助詞「と」「ばかり」 (一)(七)
				(2) 係り結び (一〇)	(2) 動詞 (三)(五)(八)
	D 県居の大人の御さとし言	(イ) 接続語に注意して段落に区切る	(1) 文章の組み立て	(1) 接続語 (2) 指示語	(1) 接続詞 (2) 指示代名詞「そ」「こ」
		(ロ) 指示語に注意して口語訳する	(2) 大意	(3) 修飾語と被修飾語	(3) 動詞
		(ハ) 大意をまとめる		(4) 副詞の呼応	(4) 助動詞
二、説話	A 絵仏師良秀	(イ) 特に文末に注意して口語訳する	(1) 叙景文・会話文・心理文の判別	(1) 説話における文末の特徴	(1) 形容詞 (2) 形容動詞
	B 能説房の説法のこと	(ロ) 話のやまをつかみ、人間像について考える	(2) 話の構成	(2) 指示語 (3) 副詞・係り結びの呼応	(3) 補助動詞（「候ふ」「たまふ」） (4) 助動詞（過去、完了、断定、尊敬、当然、自発、推量）
	C 信濃守藤原陳忠御坂より落ち入る物語	(ハ) 助動詞の重要性に開眼する	(3) 大意	(4) 順接と逆接	(5) 助詞（接助「に」・係助）

一、五、三	課題二、一、三
〃 四、六	〃 九、八、四、六
〃 一	三、二、五
〃 六、九、一〇	七、二
〃 一、七、三、五、八	〃 五、一、九、一四
〃 一、二	二、三
〃 一、六、八、三	
〃 一、五、六、一〇	
動詞のまとめ	用言のまとめ

三　随筆（中世）	A　ゆく川の流れ	(イ)　各段落で作者の意図をとらえる	(1)　随筆としての構成	(1)　文の構造（主述、主語省略）	(1)　心情語と対象語
		(ロ)　作者のものの見方や描き方の特色をとらえる	(2)　文と文との関係	(2)　修辞（対句、比喩）	(2)　助動詞（婉曲、仮定、希望、推量、比況、可能、過去―「き」と「けり」尊敬、強意）
		(ハ)　表現の特色を確認する	(3)　尾括法	(3)　倒置文と平叙文、反語文	(3)　助詞（係助、副助）
			(4)　発端と終末の型	(4)　結びの省略	
			(5)　事柄と意見	(5)　挿入句	
			(6)　要旨	(6)　助詞の省略	
			(7)　主題文の発見		
	B　つれづれなるままに				

課題一、六、二、四
〃七、八、一〇、五
三、一六
〃四、九、二
三、一五

構文・文脈のまとめ

四　物語（古代一）	A　かぐや姫	(イ)　物語の構成をとらえる	(1)　説話伝承の型	(1)　文の種類	(1)　人称代名詞
		(ロ)　敬語に注意して人物関係をつかむ	(2)　段落と段落との関係（並列型）	(2)　文の終止法	(2)　敬語（詞に属する語、辞に属する語）
		(ハ)　人物の心情の推移をたどり、古代人の生活思想を導き出す	(3)　散文中の和歌のはたらき	(3)　主語、客語の省略	(3)　助動詞（尊敬、使役、受身、推量、過去、完了、伝聞）
			(4)　古代物語の描写性		(4)　助詞（副助、接助）
			(5)　会話文と地の文との関係		(5)　接頭語、接尾語

敬語のまとめ

課題一、二、八、四
六
〃九、一三、三
五
〃七、五、三
六、三

助動詞のまとめ

〔資料Ⅱ〕 二年古典乙Ⅰ指導計画表

学期	単元	教材	指導目標	指導項目 内容把握・鑑賞関係	指導項目 文語のきまり関係	課題との関連
一	六 日記 随筆 (古代)	A 舟路 B 后の位も何にかはせむ	(イ) 各段落における作者の関心事をつかむ (ロ) 日記（紀行）文中での歌が果たす役割について考える	A (1) 書き出しの体裁 (2) 惜別の情―特に土地の人のそれ 理由―ものの見方） (3) 女児なき悲しみ、仲麿の心境との比	伝聞 断定 「なり」の弁別 指示語と文脈把握の関係 修飾と被修飾	課題一、五、一九 〃 二 〃 四
三	五 和歌 歌謡	A 春過ぎて夏来たるらし B 袖ひぢてむすびし水の C 山深み春とも知らぬ D 仏は常にいませども	(イ) 歌の心を素材との関係においてとらえる (ロ) 和歌の表現の特色をつかむ (ハ) A、B、Cの歌風と表現法の特色を比較し理解する (イ) 歌謡の心をつかみ古代人の生活感情を理解する (ロ) 表現の特色をとらえる	(1) 主題 (2) 和歌の形態 (3) 長歌と反歌との関係 (4) 詞書および題詞と歌との関係 (5) 表現の意図 (1) 主題	(1) 和歌の句切れ (2) 句と句の関係（対句、倒置） (3) 和歌の修辞（枕詞、縁語、掛詞、比喩象徴、序詞、同音、反復、本歌取り、声調） (1) 文の終止法 (2) 修辞（声調と破格）	課題三、五、七 〃 一、三 〃 一、二、五 〃 三 〃 一、四、九 課題一 〃 二、三 〃 四、六
					(1) 助詞（接助、格助、副助） (2) 助動詞 (3) 接尾語、接頭語 (4) 擬声語、擬態語 (1) 動詞（ワ行下二）活用形の用法	奈良朝語法のあらまし 和歌の修辞法まとめ 助詞のまとめ

二 七 物語（古代二）					
					(ハ) 作者のものの見方、感じ方を表現に即してとらえる
		C うつくしきもの			
	敬語法				
	A 筒井筒（後日物語を補プリ）				
	(イ) 歌物語における主題のとらえ方 (ロ) 長編物語で登場人物の心情をとらえる (ハ) 歴史物語で人物の心理の動きをたどり主題をとらえる	既習の敬語法（動詞・補助動詞・助動詞）について、その用例を分類し、整理復習する			較、古代人の信仰（関心事） B (1) 作者の浪漫的性向 (2) 物語への憧憬―薬師仏信仰 (3) 文学へのあこがれ
	(4)	(7)	(4)	(3)	(2)	(1)
	A (1) 贈答歌による幼い清純な恋 (2) 人間像 男 身がってな／貞淑な女 ハッピーエンド (3) 人物の心理表出の精緻さ (4) 時間空間の推移、散文中の歌の効果	人物関係のはあく、微妙な心理	自賛の型 (5) 末文の弁解 (6) 叙景と感想の区別（心理自照）―「九月ばかり」 描写の方法	間関係（敬語に注意） 酒落の理解 (3) 人	作者の美意識（色彩感、知的趣味）	接助格助 「を」の弁別 漸層法 比較的長文の理解 文体
	起・承・転・結の構成 「なむ」の弁別 「せ」の弁別 和歌の技法（縁語、暗喩、機知） 主語のはあく、客語省略「の」「を」「に」の弁別自称敬語	主語、省略主語のはあく 敬語法と構文まとめ		敬語表現（尊・謙・丁） 構文（かかり受け） 主、述、修、被修 生活環境語	美的感覚を示す語「べし」の意義 修飾と被修飾	
	課題 〃 一、三、四、一〇、一七、一八 〃 二三、二四、二七、六九 〃 二九、三八 〃 三六、六一 〃 三六、三七、五九		〃 二四	〃 二、五 〃 六	課題三、二九、三〇	

		B 野分だちて C 公任と道長	B (1)段落の要旨と主題 (2)人物の登場のさせ方、心理描写 (3)自然と人物の心情との融合 (4)時刻の推移 (5)散文と和歌（場面の集約） C (1)人間像のはあく（性格・心理） (2)筋の展開と主題（行動描写と対話）	文末の省略語 「たまふ」の弁別 「の」「に」「を」の弁別 最高尊敬他敬語表現、終助「な」と人物の心境 ［語の識別まとめ］	〃一 〃三、一四、一五 〃八
八 物語（中世）	祇園精舎	(イ)作者の人生観を表現を通して考える (ロ)事件の推移を読み取って当時の思想社会の中で武家としての人間像の造型をとらえる (ハ)物語の構成の巧みさ、語法、語いの特色を理解する	(1)無常観、思想的基盤 (一)(二) (2)章段の論理の展開(四)(五) (3)清盛の系図(八) (4)武家の立場（旧貴族勢力との対比）(四)(三) (5)作者の創作上の立場(八)(三)(二) (6)合戦の場面設定順序、合戦装束、合戦の前座、真打	対句、七五調、比喩 対句形式→破綻→論旨屈折 和漢混交文 合戦用語 指示語 物語の伏線 文脈 擬態、擬音語、音便 ［中世の語法まとめ］	課題一、五、七 〃四 〃六 〃三、六 〃六、一三、一八 〃七、一六 〃九、一五、一六、一七、 〃一九 〃八、九
九 語録 消息	A 善人なほもて往生を遂ぐ B 色心二法ともに	(イ)読解を通して高い人間精神にふれ、ものの見方、考え方を深める (ロ)文脈を確実にたどって論旨を理解する	A (1)作者の人間観 (2)本願他力、浄土真宗の教義 B (1)流罪に際しての感慨 (2)愛弟子へのいたわりの心情	主述関係、会話体の形式 敬語表現 追歩式構成 逆説的表現 漸層法、省略語	課題一、九、二 〃三 〃五 〃三 〃六

三				
十 俳諧	A 奥の細道	(イ) 俳文の底深く息づく作者の感動の起伏をとらえる (ロ) 各俳句の主題を感じ取り、その創作事情をも調べる (ハ) 俳文の特質と俳句の語法を理解する	A (1) 旅への執念、あこがれ（諦念的決意） (2) 別離の情 (3) 地の文と俳句との関係 (4) 俳諧百韻の形式 (5) 旅中で野夫との心のふれあい (6) 懐旧の悲哀（歴史の想起） (7) 古典、古事の引用	指示語、主語、客語 双括式構成 構文と文章構成まとめ
	B 近世の俳句		B (1) 初案、別案との相違―味読 (2) 関連した俳文の引用読解「奥の細道」「野晒紀行」「笈日記」「嵯峨日記」「笈の小文」「風俗文選」 (3) 「軽み」「わび」「王朝趣味」「近代性」「感情移入」	対句構成、文のかかり受け 比喩 副詞（「そぞろ」異説） 助詞「ものから」「も」「の」「に」 省略語 助詞「を」「ぞ」「や」 字余り 文法上の破格、正格比較 助詞「に」二面的要素 擬態語「のっと」二面性 切れ字「や」の利き目 季語 俳諧の修辞法まとめ
十一 小説	平太郎殿	(イ) 作品にあらわれた近世町人の生き方をつかむ (ロ) 人間像を心理、性格描写からとらえる (ハ) 修辞法の特色をきわめ効果を考える	(1) 要旨と主題 (2) 登場人物の人間像（亭坊、三人の男女、箱屋の九蔵…） (3) 作者の人間観	段落相互の関係―転換型 告白体 「あはれ」「をかし」意味 「われ」「われら」変遷 近世の語法まとめ

C 習道智の事	C (1) 習道（「安き位」に至る）段階 (2) 「安き位」と「大事」との関係	〃 三、五、六 〃 二
		課題一、八、一〇 〃 五 〃 九 〃 四、五、二 〃 一四、一六、七 〃 一五 〃 一 〃 一 〃 一 〃 二 〃 一 〃 二
		課題一、六、九 〃 七 〃 二

学期	単元	教材	指導目標	指導項目 内容把握・鑑賞関係	指導項目 文語のきまり関係	課題との関連
一	一古代の文学(一)	A 古事記	(イ) 古代人の信仰や生活に関する理解を深め読解力をつける（古事記） (ロ) 各歌人の境遇やその関心などを識別し、表現にみられる強力な個性にふれる（万葉集） (ハ) 読解を通して上代の語法のあらましを理解する	A (1)「古事記」の成立事情 (2) 段落と要旨 (3) 歌謡の形式（短歌、片歌、未定型） (4) 古代人の信仰 (5) 地名起源説話 (6) 主人公の浪漫性と悲劇性 B (1) 感動の中心（各短歌について） (2) 長歌における主題 惜別、哀憐、讃嘆、愛惜、 (3) 作者の境遇と作歌事情 (4) 和歌における付属語の占めるウエイト	「…せば～まし」の呼応 形容詞の未然、已然形の古形「ーけ」「ーしけ」 接続詞「すなはち」 助動詞「ゆ」「らゆ」「す」 補助動詞「ます」 助詞「より」の古形 「よ」「に」「と」「も」「な」「の」「や」「が」「のみ」「し」「を」「ども」 長歌の構成 奈良朝の助詞、助動詞	課題五 〃 七 〃 三 〃 三 〃 三 〃 二 〃 一、二、七 〃 一、一、三
		B 万葉集				
二古代の文学(二)		A 枕草子	(イ) 枕草子各段の主題、構成を考え作者の人間像をとらえる (ロ) 源氏物語、筋の展開、文章構成、登場人物の心境、心情の推移をとらえる (ハ) 大鏡の文章構成、人物や事	A (1) 作者の性格（人間像） (2) 主題と構成 (3) 当時の習俗 B (1)「明石」「松風」にわたって「琴の御琴」の果たす役割と文章構成との関連	形容詞と作者の心情 「すさまじ」「わびし」「あいなし」「わりなし」「にくし」「うれし」「をかし」「おどろおどろし」「つれなし」「くちをなし」「ねたし」「やむごとなし」「はづかし」	課題三、五 〃 八、一〇 〃 一四、一五 〃 四 〃 九 〃 一二、一三 〃 二、八、一三、一五…
		B 源氏物語				

		件に対する筆者の批判精神をとらえる (二) 平安時代のことばのきまりに関する事項を確実にする	(2) 「明石」における明石の君の心境と「松風」におけるそれとの変化 (3) 「薄雲」―明石の君の心情の推移 (4) 右の各々の間に登場する源氏、弘徽殿、朱雀帝、明石入道、尼君、紫の上などの心理の動きとの交錯	敬語法と主述関係 助詞「を」の弁別 構文（かかり受け） 掛詞、縁語 省略語 構文、文脈と心情語い
		C 大鏡	C (1) 道兼の策謀と乗ぜられる花山院帝の心境 (2) 花山院出家について、大鏡と栄華物語とで作者の見解の相違 (3) 道長の言動から性格、道兼・道隆と比較	段落（会話）構成と作者の意図 敬語「おぼす」「おはします」…尊敬の「る」「らる」と「給ふ」の関係 敬語法と人物関係
二 三 中世の文学	A 平家物語 B 徒然草 C 歌論・能楽論 D 連歌・歌謡	(イ) 人物の描き方、時代の中の人間像をとらえる (ロ) 作者の思想的立場を理解し、思考力、批判力を伸ばす (ハ) 論者の立場や論の展開を明らかにする (ニ) 形態の特色および時代との関連について理解し鑑賞力をつける	A (1) 維盛と北の方との会話を通して維盛の人間像（単身都落の理由、別離の苦悩） (2) 特異な女性像（巴）の造型 (3) 唯二騎になった義仲・今井主従の交情とその人間像 B (1) 品位ある会話の態度 (2) 仏道修業における外形の必要性	文脈、省略語 助詞「も」の働きと文脈 指示語 主語、述語 段落と論旨の展開 指示語 主題 「の」の用法 文章構成法

〃	七
〃	一〇、一一
課題五、六	
〃	五
〃	八
〃	一、一〇、一二、一三
〃	一、六
〃	三、四、五、七
	九
〃	七、八、九、一〇
	一四
〃	五、九、一四

				(3) うそが真に転ずる経緯、うそを語る人の心理、うそに対処する心得 (4) 為政者の心がけ「恩愛」と「慈悲」との関係 (5) 会話主と人物関係、応対の態度	
三	四 近世の文学	A 俳諧	(イ) 作者の文芸観、人間観にふれる (ロ) 強靱な求道精神と文芸における不易と流行とについて理解を深める		
		B 浮世草子	(ハ) 近世における新しいモラルや人間像の描写を確実にはあくする (ニ) 封建社会という枠の中で描かれた義理、人情を読みとり近松の人間観をとらえ人間愛の精神を養う		
		C 浄瑠璃	(ホ) 文体上の特色を理解し、その表現を味読する (ヘ) 近世文語文のもつ、特殊な表現形式、語法、語いについて理解する		文体と構成

Ⅳ 内容と提示のしかた

(一) 内容（特に留意したこと）

(1) 課題の系統化を志向したものに

a、発達段階に応じて「問い」の深化、高度化をはかるようにした。（学年の段階、同学年のうちでもそれぞれの段階に応じて）

b、生徒が三ケ年のうち少なくともこれだけのものを習ったということが系統的にながめられるようなものにしたいという念願。

(2) 教材の指導目標と、それに応じた指導項目とに密着した課題に。〔資料Ⅰの計画表中、一、古文入門C笑ひ話の指導目標・指導項目と、資料Ⅳの課題例その一とを対比して参照。資料Ⅱの計画表中、八、物語、祇園精舎の指導目標・指導項目と、資料Ⅴの課題例その二とを対比して参照。資料Ⅲの計画表中、一、古代の文学(一)、B万葉集の指導目標・指導項目と、資料Ⅶの課題例その三とを対比して参照。〕

(3) 読解のポイントをおさえたものに。（確かな読解力をつけるために）

(4) 教室でも、生徒の作業を通して読解力・鑑賞力が養えるようなものに。（個人のあるいはグループの）

(5) ノートを駆使しての学習ができるようなものに。（感想、印象、主題、大意、要旨、構文、人物関係、口訳、……）

(6) 発展的追求の態度をも盛り込んだものに。（読解の応用力を養成するため関連教材を興味の延長として原文で読ませる）

〔特に三年生での課題、資料Ⅶの課題例その三の「参考課題」、および資料Ⅷの課題例山部赤人吉野讃歌課題三、同じく勝鹿の真間の娘子を詠める歌課題五、を参照〕

(二) 提示のしかた

(1) 「準備学習の課題」「教室学習の課題」「発展学習の課題」と分けるのがたてまえであろうと考えるが、自分のばあい「教室学習の課題」を中心に作成し、準備学習、発展学習の課題をつけ加える程度にした。

(2) その教材に入る前時に学習補助プリントとして配布することを原則とした。

a、教材全般にわたる課題を一度に与えるのが当然必要なわけであるが、たとえば三枚のうちNo.1だけ配布しておくということがままあった。

b、生徒は課題を概観して、この部分ではおおよそどういうことがらを学ぶかを知り、それに従って自宅学習をしてくる。

(3) 教室での学習活動の展開の中で、課題を必要に応じて適宜くみ入れて行く授業にした。

だから課題は、実際の教室での学習活動の姿が具体的に示されているように作成することを心がけた。

笑ひ話

課題一、二つの話をよく読んで、それぞれの話の中で会話の部分に「 」をつけてみよう。
そのばあい、会話文と判断した根拠をはっきりさせておこう。

二、わからないことばは辞書をひきながら、ノートに口語訳をしてみよう。

三、P181行「蛇に見えて」、同2行「見る時ばかり」、同4「堀りてみれば」、同4「見わすれたか」において傍線の動詞は同じものかどうか。活用の種類と活用形とを言ってみよう。

四、同3「件の亭主」とはだれのことか、文中の他のことばで指摘してみよう。

五、同3～4「のちに掘りてみれば、蛇あり。」における「ば」の意味を復習し「あり」について活用表を作ってみよう。

六、同4「やれおれじゃ、見わすれたかと、いくたびもなのりつるこそ聞きごとなれ」の一文における主語、述語の関係を明らかにしてみよう。省略語があれば全部補って考えよう。

七、同6「十人ばかり」について「ばかり」の意味を、同2「身が見る時ばかり」およびP192「脇差のさやばかり」と比べて、その異同を言ってみよう。

八、同6「参詣しけり」同7「下向する道すがら」二つの動詞の活用の種類と活用形を言ってみよう。

九、P191「腰のまはりを見れば」
同2「力をそへてさしたり」
同2「こは何としたぞと言ふに、肝をつぶしたり」
という述語に対する主語は誰か、前後の文脈からよく考えよ。

一〇、二つの話の中にそれぞれ係り結びがある。指摘してそのはたらきについて復習しよう。

一一、二つの話は、それぞれどこにおもしろみがあるか、話しあおう。

新しく習ったことがら
一、
二、
三、
四、

祇園精舎（平家物語）

課題一、P.1436行までの部分で作者の人生観を、その表現を通して考えてみよう。

二、作者がこのような人生観に帰着するに至った思想的基盤は何であったろうか。

三、P.142 1、2「祇園精舎の鐘の声」「娑羅双樹の花の色」と聞いただけで、当時の人々の脳裏に浮んだ状況はどんなものだったのだろう。

四、P.1436までの章段の論理をたどってみよう。

(1) 最初から対句形式で論理は展開している。その対句をとらえてみよう。

(2) 後半部分で対句形式の破綻をきたしているが、どの部分か、説明してみよう。

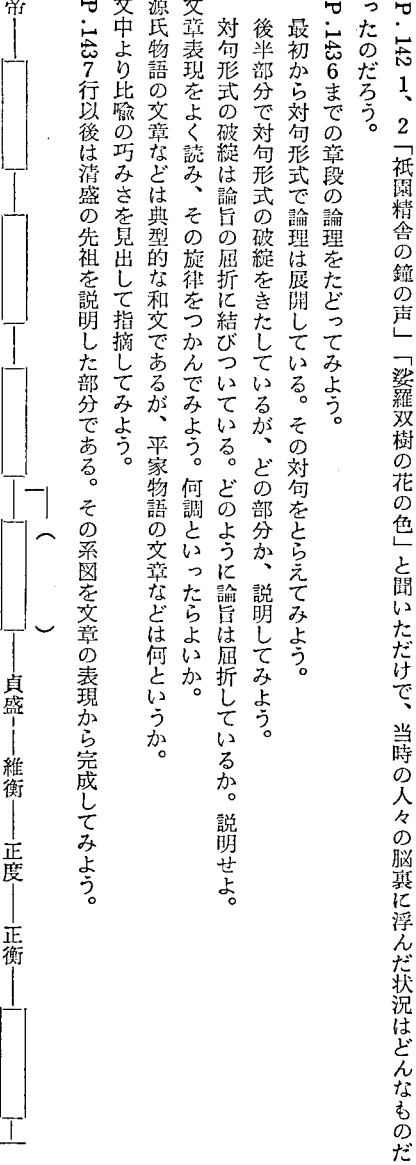
(3) 対句形式の破綻は論旨の屈折に結びついている。どのように論旨は屈折しているか。説明せよ。

五、文章表現をよく読み、その旋律をつかんでみよう。何調といったらよいか。

六、源氏物語の文章などは典型的な和文であるが、平家物語の文章などは何というか。

七、文中より比喩の巧みさを見出して指摘してみよう。

八、P.1437行以後は清盛の先祖を説明した部分である。その系図を文章の表現から完成してみよう。



殿上の闇討ち（平家物語）№1

課題一、全体を通読して、事件の推移を読みとって、全体三つの段落に分けて考えよう。

二、「殿上の闇討ち」では「平家物語」前半の中心人物清盛の登場にあたって、まずその父の忠盛昇殿のことが叙述されている。そのことを念頭において読んでみよう。

三、P.144 4、5行忠盛が備前の守であったとき、鳥羽院の御願寺を造営し献上したことは、武家である平氏にどのような実力が備わったことを意味するのであろうか。

四、P.144 6「忠盛三十六にてはじめて昇殿す」には含蓄がある。前章の「祇園精舎」において国香より正盛に至る六代までは諸国の地方官に終わって「殿上の仙籍」をば許されなかったという記事から、その含蓄の意味するところを考えよう。

五、〃7「雲の上人これをそねみ」とあるが、藤原氏一門で固めた貴族出身の公卿たちの嫉妬が、この課でどのような事件の展開として描かれているか注意して読んでみよう。

六、P.145 10「これらをよしなしとや思はれけん、その夜の闇討ちなかりけり。」とあって、結局は忠盛が闇討ちされることはなかったのだが、その理由は「これらをよしなしとや…」の「これら」に当たる。「これら」の内容二つあるが、簡潔にまとめて述べてみよう。

七、忠盛が公卿の闇討ちの陰謀を察知していろいろな配慮をしたことがP144 8～P145 11までの描写である。これは第三段において物語りが展開して行く伏線になっている。よく検討してみよう。

忠盛の用意周到さを充分とらえてみよう。

八、忠盛の郎等、家貞の先祖の系図を比較的詳しく述べていることは、何を意味するか。

殿上の闇討ち（平家物語）№2

課題九、第二段の前半の挿話は、この「殿上の闇討ち」の章段においてどのような物語上の効果を盛りあげるためなのであろうか。

10、P.145 12「伊勢平氏はすがめなりけり。」とはやされた忠盛は、P.146 3で「いかにすべきやうもなくて、御遊もいまだ終はらざるに、ひそかにまかりいでらるる…」という結果になる。

このあたりから、この時代における武家の立場を、旧貴族勢力との対比において読みとってみよう。

二、〃「伊勢平氏は…」と忠盛がはやされた由来をP.1462にかけて説明されている。まとめてみよう。
〃13「この人々は」に対応する述語を考えてみよ。
三、P.1444、5「力をば…主殿司を召して預けおきてぞいでられける。」は第三段への伏線になっている。検討してみよう。
三、〃7「かくとも言はまほしう思はれけれども…」とあるが、何と言いたかったのか。
四、〃8「殿上までもやがて切りのぼらんずる者にて」と説明されているのは誰か。
またP.1477～9の「　」のことばをも関案して、その態度から武家の家臣らしい性根を読みとろう。
五、P.1460から、第二段の後半に入るが、この挿話と、第二段前半の挿話との関係について考えてみよう。
六、〃〃後半部には、五節におけるさまざまな事件の例をあげているが、前半で忠盛がはやされた事件以後の物語の推移にどのような効果を発揮しているか。
七、P.1476「…末代いかがあらんずらん…」とある人が申した　とあるようなところから、この後半部にあげてある挿話のいくつかの例は、どんなことの例としてあげてあるのか。

殿上の闇討ち（平家物語）No.3

課題六、P.1478以後第三段であるが、五節が終わると、果たして殿上人たちが揃って鳥羽上皇へ訴訟するという事体になる。P.14712「両条希代いまだ聞かざる狼藉なり。」とあって、殿上人たちが忠盛を訴える罪状として二つのことをあげている。その「両条」とは何々か。
八、P.1481～7忠盛は鳥羽上皇の尋問に対して理路整然と弁明している。その弁明の内容と殿上人たちが訴えた格式の例にそむいたという罪状とを対比して、弁明の筋が通っているかどうか検討してみよう。
九、P.1489～13鳥羽上皇はこの裁判における判決を、P.14813「忠盛の咎にあらず」と無罪にしている。これは忠盛の弁明を一つ一つ尤もなこととして認めているようである。けれども今までの貴族社会の格式の例に照らして尤もなことと認めていることになっているか、検討してみよう。
十、課題三を考える場合にP.14811「弓箭に携はらん者のはかりことは、もっともからんこそあらまほしけれ。」などと鳥羽上皇は武士たるものの計略をかえって賞讃し、12～13行では「武士の郎等の習」を当然許されるべき行ないとして判決を下していることを参考にして考えよう。
十一、平家物語におけるこの「殿上の闇討ち」の章の果たす役割り、つまりこの闇討ちの事件の醸す時代的意義を考えて見よう。

大伯皇女の歌（万葉集No.3）

わが背子を……

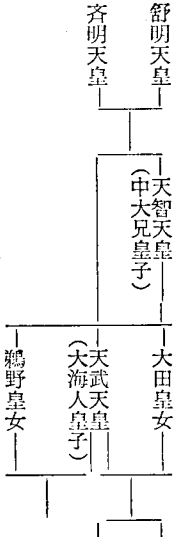
一、「…わが立ちぬれし」の「が」の格、「し」は連体形になっているがなぜであろうか。

ふたり行けど……

一、「…ひとり越ゆらむ」の「らむ」の性格を考えることによって、大伯皇女の気持ちを理解してみよう。

（参考課題）右二首の理解を深めるため、大津皇子の悲劇性を追求してみよう。

○大津皇子の悲劇は生母大田皇女の死によってはじまるといってよい。その系図は次の通りである。



○大津皇子の人物について「日本書紀」「懐風藻」にそれぞれ次のようにある。

「容止墻岸、音辞俊朗なり、天命開別天皇（天智）の愛する所となる。長ずるに及んで弁にして才学あり、尤も文筆を好む。詩賦の興ること大津より始まれり。」（「日本書紀」）

「壮貌魁梧、器宇俊遠なり、幼年にして学を好み、博覧にしてよく文を属る。壮に及んで武を愛し、多力にしてよく剣を撃つ、性頗る放蕩にして法度にかかわらず、節を降して士を礼す。これによって人多く附託す。」（「懐風藻」）

○皇太子草壁皇子と大津皇子とをより深刻に対立させたものに政治問題とは別に女性の問題がある。

日並皇子尊、石川女郎に贈り賜ふ御歌一首　女郎、字を大名児といふ

大名児を彼方野辺に刈る萱の束の間もわれ忘れめや（巻二、一一〇）

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

あしひきの山の雫に妹待つとわれ立ち濡れぬ山の雫に（巻二、一〇七）

石川郎女、和へ奉る歌一首

吾を待つと君が濡れけむあしひきの山の雫に成らましものを（巻二、一〇八）

○天武天皇が、天武十四年（六八六）に病にたおれたことは両者の間を険悪なものにした。身辺に迫る目に見えぬ圧迫に堪えかねて伊勢斉宮として伊勢の地にあった姉の大伯皇女のもとに出かけた。

詞書に「大津皇子竊に伊勢に下りて…」とある「竊に」を何か謀反の相談のためひそかにとする考え方。たとえ実姉といえども神に仕える女性に逢いに行く事は許されないことで「竊に」としたとする考え方。

○天武十四年（六八六）九月九日天武天皇崩ず。持統天皇の御世となる。

○「南の庭に殯して　即ち発（みたてまつ）哀る。是の時に当りて、大津皇子皇太子を謀反（かたらひけ）むとす。」（「日本書紀」九月二十四日の記事）

○十月二日に謀反が発覚して捕えられ、習三日に殺されてしまった。

大津皇子　被死（みまか）らしめらゆる時、磐余（いはれ）の池の陂（つつみ）にして涕を流して作りましし御歌一首

百伝（ももづた）ふ磐余（いはれ）の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠（がく）りなむ（巻三、四一六）

皇子臨終

金鳥臨二西舎一、鼓声催二短命一、泉路無二賓主一、此夕離レ家向。（「懐風藻」）

○この時、皇子の妃山辺皇女（天智の末女）が殉死した記事が持統紀にある。

「被レ髪徒跣、奔赴殉焉、見者皆歔欷。」

○大伯皇女は天武天皇の死によって伊勢の斉宮を退いて朱鳥元年（六八六）十一月十六日帰京

大津皇子薨（かむあが）りましし後、大伯皇女伊勢の斉宮（いつきのみや）より京に上る時の御歌二首

神風（かむかぜ）の伊勢の国にもあらましをなにしか来けむ君もあらなくに（巻二、一六三）

見まく欲（ほ）りわがする君もあらなくになにしか来けむ馬疲るるに（〃一六四）

うつそみの人なる我や明日よりは二上山を弟世（いろせ）とあが見む（巻二、一六五）

磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言はなくに（巻二、一六六）

〔資料Ⅷ〕　実践した課題例　その三　（続）

貧窮問答歌（万葉集No.6）

課題一、この一篇の構想は、二人の者が問答をする形で、彼らの生活を語りあうことによって二人の人間を描き出そうとしている。問と答の部分はどこまでとどこまでか。

二、前段の人間像と後段の人間像とは、どのようなものとして描かれているか。その生活の状態はどうか。精神力においてはどうか。

三、後段P.215および同6「人とはあるを」「あれもなれるを」の部分には、この人のどのような気持ちがあらわれているであろうか。同じような気持ちを表現している部分を他に求めてみよう。

四、後段において、憶良の思想的基盤となっている儒家的相貌のあらわれている部分をあげてみよう。

五、P.212「里長」の姿をどうとらえているか、また、このとらえ方は作者の、どのような気持ちを象徴していることになろうか。

六、本歌の終わりに「かくばかり術なきものか世間の道」と言っているのは、この歌の結論ともいうべきものだが、一体何を嘆いているのであろうか。

七、反歌において、「…鳥にしあらねば」の「し」には、憶良のどのような心情、態度がうかがわれるか。

八、反歌の次に「山上憶良頓首謹上」とある。これからみるとこの歌は誰かに謹上したものと思われる。とすれば、この歌の本来の目的はどう想定できるだろうか。

九、憶良の性格をこの歌から考えてみよう。

山部赤人、吉野讃歌（万葉集No.7）

課題一、この長歌の主題は何か、まとめてみよう。

二、伝統を負う皇室讃歌は整った構成をとろうとするところから、歌には儀礼的なものが強くなりがちであることが指摘される。この歌からそのような部分を指摘してみよう。

三、この歌は特に人麻呂のもの（巻一、三六）からの模倣がいちじるしく目立つといわれるが、次に挙げるので比較し検討してみよう。

吉野の宮に幸しし時、柿本朝臣人麻呂の作る歌

やすみしし　吾ご大君の　聞し食す　天の下に　国はしも　多にあれども　山川の　清き河内と　御心を　吉野の国の　花散らふ　秋津の野辺に　宮柱　太敷きませば　百磯城の　大宮人は　船並めて　朝川渡り　舟競ひ　夕河渡る　この川の　絶ゆることなく　この山の　いや高知らす　水激　瀧のみやこは　見れど飽かぬかも　（巻一、三六）

反歌

見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなくまた還り見む（巻一、三七）

四、「み吉野の象山の…」の反歌は、自然幽寂境の最奥部に快く浸っているものの恍惚感がある。その静寂さを送説的効果で印象を深めている。どの表現がそれか。その写生の極致を味わおう。

五、「ぬばたまの夜のふけぬれば…」において、夜も深更に及んでしかも視覚に訴えたこの歌の表現は、どのように理解すればよいであろうか。

また、この時の赤人の心境を充分に読み取ってみよう。またその時の情景を自在に思い描いてみよう。

勝鹿の真間の娘子を詠める歌（万葉集No.8）

課題一、この歌は当時既に真間の手児奈伝説として伝えられていたものを歌ったものである。手児奈が伝説上の美女なるが故にかえって生々と、そして奔放に、情熱をこめて描きあげられている。その過程を叙述を追って確かめてみよう。なかでその美女ぶりを最もよく表現している部分をあげよう。

二、この手児奈が後世語り伝えられたのは、どのような理由によるものであろうか。当時のその土地の人々に大きな感動を与えたに違いない、その事件をこの歌の表現の中から読み取ってみよう。

三、「波の音の　騒くみなとの　奥津城に」あたりから右に言った事件を推測してみよう。

四、今から考えるといささか不可解にも思われるこの事件の背後には、当時の社会事情があったようである。どんな事情か想像してみよう。

五、高橋虫麻呂が勝鹿の真間を訪れてこの歌を作る少し前に、山部赤人が同じくそこを訪れて手児奈のことを歌っている。次にあげるので比較してみよう。

勝鹿の真間娘子の墓を過ぐる時、山部宿禰赤人の作る歌一首

古に　在りけむ人の　倭文幡（しつはた）の　帯解きかへて　伏屋（ふせや）立て　妻問（つまとひ）しけむ　葛飾（かつしか）の　真間の手児名が　奥つ城を　ここだは聞けど　真木の葉や　茂りたるらむ　松が根や　遠く久しき　言のみも　名のみもわれは　忘らゆましじ

反　歌

われも見つ人にも告げむ葛飾の真間の手児名が奥津城（おくつきどころ）處

葛飾の真間の入江にうちなびく玉藻刈りけむ手児名し思ほゆ

V　指導過程における位置づけ

教室で、実際の学習活動の中に課題をどのように組み入れて行くか、その具体例の一つを次に示したい。

これは資料Vの「祇園精舎」の課題を、実際の授業の中でどのように取り入れて行ったかを具体的に示すものである。

〔資料Ⅳ〕 学習指導の展開例（41年11月実施）

一、教材「祇園精舎」のばあい

二、対象、時期、第二学年、二学期（資料ⅢおよびⅤを参照）

三、指導目標　1　章段の論理の展開をつかむ

　　2　表現の特色（対句、比喩、施律）や文体を知る

　　3　作者の人生観をつかむ

四、学習活動

（予習）	課題プリントを配布し何回も音読してくるよう指示（前時のおわり）	A、教科書の前書（リード）を指名読み B、簡潔に話す C、学習の「ねらい」について板書、説明
導入	Ⅰ　教材の出典と教材の背景に対する注意の喚起 (1)　教科書のリードを手がかりに、簡潔に（平記物語、平曲と作者、平氏の興亡をテレビ映画「義経」などとの関連で話す） Ⅱ　指導目標の確認 (1)　生徒には、注意事項として板書 a　古来名文と言われる根拠（目標2） b　世相を反映するものの考え方（目標3） c　中心人物の描き方（目標1）	
展開	Ⅰ〈主題の推定〉この文章はどういうことを述べようとしたものか見当をつける。 Ⅱ　まず前段の論旨の展開をたどる (1)　前段をさらに二節に区切る｛第一節（初め―P.1424行「ちりに同じ」） 　　第二節（P.1424行「遠く異朝を」―P.1436「及ばれね」）｝ (2)　対句形式による展開 a　(イ)　祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり b　(ロ)　娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす a′ b′	A、指名読み B、課題一、二を念頭において黙読（ノートへの記入―発表） C、「祇園精舎の鐘」「娑羅双樹の花」について、脚注に加え補足

<対句形式の破綻>

(イ) おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし c d
(ロ) たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前のちりに同じ。 c′ d′

諸行無常・盛者必衰
おごれる人も久しからず　たけき者もつひには滅びぬ
→第一節要旨

実証 ←

(ハ) 遠く異朝をとぶらへば……○久しからずして、亡じにし者どもなり。 e
(異朝の人々をあげて実証)
(ニ) 近く本朝をうかがふに……×つひには滅びにし人どもなり。etc. e′
(本朝の人々をあげて実証の筈)

……

おごれる心
たけきこと

実証 ←

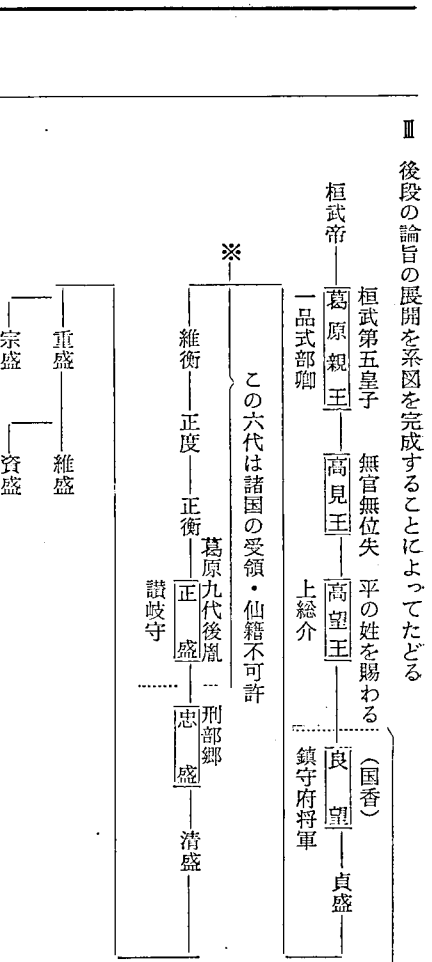
も、皆とりどりにこそありしかども、——
(清盛に比重をかけたために起こった論旨の屈折)

—まぢかくは……清盛公と申しし人の ありさま (おごれる心、たけきことのありさま)
伝へ承るこそ心もことばも及ばれね。

異朝（中国）の人物——盛者必衰の理念を実証
本朝の人物——おごれる心・たけきことのありさまを説明
その最大級の人物——清盛
→第二節要旨

説明
（重要語）
諸行無常、盛者必衰
ことわり、とりどり
etc.にもふれる
D、課題四、を考えさせる
○対句形式による展開を四人一グループで西洋紙へ図示
○次時までに模造紙へ清書を指示
E、三つのグループを選び発表説明
（全員による批評・評価）
F、指導者の批評・評価
「特に対句形式の破綻に力点」
「平家物語」—前半の主人公、清盛の登場のさせ方
G、課題五、六を発問する
○前段第一節の各文などにみえる漢文訓読系の措辞に注意
○和文脈と漢文脈との混合を認識

Ⅲ 後段の論旨の展開を系図を完成することによってたどる



Ⅳ ＜主題の確認＞

(1) 後段の清盛の系譜は、むしろ次の「殿上の闇討ち」の段に入れるべき性格のもの（「殿上の闇討」の冒頭「しかるを忠盛備前守たりし時…」に直接続く）

(2) 前段の主題

「諸行無常盛者必衰のことわり」――平家物語全編の主題を掲げた冒頭の四句から作者が武士の興亡を仏教的世界観からとらえていることを察知

H、課題八を考えさせる
○文章中の指示語の指示内容を誤りなきよう注意
○ノートに整理させる
○指名して板書

I、指導者文章を読みながら補充完成

J、官職表の見方を辞書の附録で研究させる「式部卿」「刑部卿」

K、国名府県名対照地図で「讃岐」「上総」を調べさせる

L、課題一、二に再びもどって考えをまとめる
○ノートへ記入―発表

M、簡潔に話す

N、生徒の暗誦で結ぶ

結び

Ⅰ 時代的背景について、文体と内容との関連について補足説明する

Ⅱ 前段を暗誦させる

Ⅵ 反省と今後の問題

(一) 実践してみると課題の不備がめだってくる。

a、発問そのもののしかたの不備

b、不足のもの――課題の形としては取りあげることのできない問題がどうしても残る。（教材研究をしていて、あるいは実地の授業をしていて真に古典の心にふれるときのあの微妙な味わいなど）――これが課題学習のひとつの限界でもあろうか。

c、選ぶことのむつかしさ――どれをどこで重点的にとりあげるか、ばあいによっては、どれをいかにふるい落として行くかに苦慮せねばならぬことを痛感した。

(二) 課題の系統化の問題

生徒の発達段階に応じて課題の深化、高度化をはかろうとしたが、たとえば「文語のきまり」といった一応の体系が定まっている項目は配列がまずまずやれる。

問題は、読みの掘り下げ、理解の深まり、心情の追求の度合いなど、読解・鑑賞の質的深化、高度化をどのようにしてはかればよいか。（教材の選び方、教材のレベルアップはそれとして課題の形としてどのように）

(三) ともすれば講義調に流れやすい古典学習のマンネリ化はふせげる。グループの話し合いによる課題解決には特に生徒は興味を示す。ただ習得事項が明らかになるので、これだけやっておれば安心というように安易に流れる生徒も出てくるので注意が肝要である。（その対策としては、発展学習の課題を積極的に組み入れて、その教材を習得した時の読書意欲と興味の延長として関連教材を読ませるとか、あるいはまた、たとえば、一年生で「徒然草」の教材を習ったのを機会に「徒然草」の参考書一冊買って自宅で毎日着実に読んで行かせる。二年生で「枕草子」、三年生で「源氏物語」というふうに。――これらの参考書は希望を取って共同購入し、読みかたを指導し学期試験に範囲として加えるという方法を採った。

(四) 主体的学習をめざしたものが、かえって主体的な学習態度を阻害する結果にならないよう常に留意せねばならぬことを痛感した。（課題の質を相当に精選し高めて行く努力と、積み重ねによる改善が必要。また、あまり緻密化することは、生徒の思考の自由を奪う結果になる。生徒の試行錯誤の余地を残すようなものにせねばならないことを認識させられた。）

(五) 課題は、あくまで生徒の実態に根ざしたものでなくてはならない。定期試験（中間・期末）や模擬試験（校内・中ブロ・旺文社）や、適宜の小調査などの機会を利用してその実態をはあくしようとしている。今後もっと指導事項に限った実態調査をも適宜やって課題作成の基礎にしたい。――（注意すべきは、それでなくてもテストの多い現在で、生徒の嫌悪感に触れないような調査にしなくてはならない。）

(六) 大学入試という除き去りがたい現実にも対処するために、本格的な学習の要請がある。本格的な学習とは、その教材を徹底的に読解して行くことである。その表現を通して作者の思想と人間を読みとることである。――こうした本格的学習の手だてとして今後も課題学習の長所を生かし、改善しながら推進して行きたい。

(七) 今後は、できればグループ学習によって生徒たちみずからの手で問題を作成するところまでもって行きたい。（作成が完了したときは理解も完全になっているように、その進め方について今後検討して行く考えである。）

(八) めざすところは、生徒みずからポイントをおさえた課題を、自分で自分の意識の中で作り出し、それをまた意識の中で解決しながら読み進めることができるようにすることである。テーマを「課題意識にもとづく」としている所以である。

(九) 全く手さぐりのまま進めて来たこの学習法、不備なところが至るところに目立ち、いまだに暗中模索、あるいは試行錯誤の連続のあゆみである。諸賢の忌憚のないご批判、ご指導を賜わりたいと思います。

なお本稿は、昭和四十二年八月十三日、第八回広島大学国語教育学会で口頭発表したものである。

（広島県立尾道北高等学校教諭）